

2021年度

2月10日

入学試験

国語

(50分)

注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□一から□五まで、12ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は1字として数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明高等学校

一

次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 洪滞がカンワされる。
- ② 読書のミリヨクにとりつかれる。
- ③ 都心からコウガイに引越す。
- ④ 君は決してコドクなんかじゃない。
- ⑤ ユウカンに立ち向かえ。

二

次の——部の漢字をひらがなに直しなさい。

- ① 図書館で資料を閲覧する。
- ② 匿名でメールを送る。
- ③ 壮大なプロジェクトに携わる。
- ④ 交通ルールを遵守する。
- ⑤ 昨年の優勝校が、連覇を阻まれた。

三

次に示すⅠとⅡは、同じ筆者によるエッセイです。二つの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ マカロニの穴のなぞ

マカロニにはなぜ穴があいているのか。理由は三つある。まず第一にマカロニはゆでて作るのも、もし穴がなかったら、中央の芯の部分がゆでにくい。

第二にマカロニはそれ自身は無味なのでソースをたくさんつけて着せなくてはいけない。だからソースが十分にからまる表面積が必要で、そのために穴をあけて内側にも表面を作る。一部のマカロニには筋がはいっているがこれは表面積アップとソースをからめやすくなるための工夫である。

三番目にこれは工業製品であるから作りやすい形であることが大事。マカロニはその断面の形、つまり太マジックで描いたマルのような形の穴から原料を押し出してやればできる。

もちろん、美味しそうに見えることや、長くつきあっても飽きないシンプルさも大事で、穴あきマカロニはそのすべてを満たしている。こう考えると単純なマカロニも実は慎重なデザインでの成果であることがおわかりいただけよう。事実、イタリアでは著名な建築家やデザイナーがマカロニを設計している。貝、リボン、渦巻き、アルファベットなどなど、そのバリエーションの豊富さはご存じのとおり。

マカロニは小麦を粉末原料に還元したあと、それを形にして

いくわけであるから基本的にはどんな形でもかまわない。  
A マカロニの歴史の中ではおそらく実に様々の形が試されてきた。

かくいう私も、かつて日本の建築家やデザイナーを多数動員してマカロニの競作を実施し、ミラノで「マカロニ展」を開催した経験がある。とても人気を博した展覧会だったが、残念ながら私たちのマカロニは一般家庭のお皿の上で賞味されるには至っていない。現在の市場で生き残っているマカロニはそれなりにテーブルの上で支持され勝ち残ったデザイン**の強者**であり傑作なのだ。イタリアは美味しいものを追求する明るい情熱でマカロニを進化させた。これは尊敬に値する。

ふり返って和食はどうか。日本にはヒモ状の傑作、

B

うどんやそばがある。イタリアにもスパゲッティがあるが、うどんやそばの簡素さほもとと東洋的。最後は包丁で仕上げる四角い断面は箸によく馴染む。つゆに浸して音を出して啜りながら食べるのは麺とつゆの量のバランスを食べながら調節するという発想。もたもたしているるとつゆが麺に乗らない。食べる方にも技術がある。ずずーっという音を出して食べるのが正しい。

## II 手のひらの装丁

二年ほど前に装丁を手がけた新書のシリーズが少しずつ数を増やし、書店でもようやく一〇〇冊を越える幅になってきた。

淡いシルバーが基調色のこの新書は、<sup>①</sup>表紙の中央に白く四

角い空間を抱いている。これは書籍が「いれもの」であることを象徴したデザインである。ちよつと大袈裟だがそのイメージのルーツは遙かな太古にさかのぼる。

人類が直立歩行を始めた時、自由になった両手で何を始めたか。一般的には映画『2001年宇宙の旅』に登場する有名なシーンながら、類人猿はこん棒のようなものを手にし、それを武器のように用いたと考えられている。道具を用いて自らの身体能力を拡大し、世界を加工していく知恵がそこに芽ばえた。しかし直立歩行で解放された手には実は人類と道具のもうひとつのイメージの原形が潜んでいる。自由になった両手を合わせると小さな空間ができる。人類の祖先はこれで水をすくって飲んだ。すなわち「うつわ」の始源がそこにある。

こん棒とうつわ。世界を加工し変容させていく道具と、何かを保存し蓄えるための道具。人間が長い歴史の中で創造し進化させてきた道具はこの二つの系統に集約できる。試しに人間の生み出した道具がどちらに属するかを想像していただきたい。例えば包丁、ハンマー、パワーショベルなどは<sup>②</sup>こん棒系。クルマや電車などは内部に空間を宿すので一見うつわにも見えるが、走るという身体機能を増幅させている点ではやはりこん棒系か。

一方、瓶や食器、箱などはこちらも、衣服や建築は<sup>③</sup>うつわの系統である。紙や磁気テープなど記録のための道具もこちらの系統。書籍の場合、紙が束になり積層されて本になるとい

イメージが自然だが、知識を大切に保持する営みの原形として、両手を合わせた空間はより象徴的だ。閉じると一匹の蝶がかるうじてはばたくことのできるささやかな空間ではあるが、コンピュータという無限の知の容器の起源すらここにあるのではないか。

新書は書店の棚で増殖する。それは机の周辺にもいつしか散在し、ポケットやバッグの中にも容易に滑り込む。したがってそのデザインは装丁というよりも環境デザインだ。それが気持ちのいいものであるためには究極のシンプルさが必要。だから手のひらの空間を配した簡素なデザインである。

新書は静かであればいい。しかしそれが知の容器としてどこまで育ってくれるか。それは少し楽しみなのである。

(原研哉『デザインをめざめ』より)

問一  A  B に当てはまる最も適当な言葉をそれ

ぞれ次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア また イ すなわち ウ しかし  
エ さて オ だから カ いっぽう

問二「<sup>①</sup>表紙の中央に白く四角い空間を抱いている」とありますが、筆者がこのデザインにこめた思いを説明しなさい。

問三「<sup>②</sup>こん棒系」、「<sup>③</sup>うつわの系統」という考え方にたつき、以下の道具はそれぞれどちらに分類できますか。②および③という数字で示しなさい。

- ア 鉛筆 イ テント ウ コップ  
エ 船 オ マスク カ セーター

問四 二つのエッセイを読み比べて、次の各問いに答えなさい。

- 1 二つの文章に紹介されている全ての具体例について、そのデザイン上の共通点を文中の言葉を使って簡潔に書きなさい。

2 次に示すのは、本文の読み比べをした生徒の作文ですが、

その文中の（ X ）・（ Y ）に当てはまる最も適当な言葉それぞれ後の語群から一つ選び、記号で答えなさい。

Iのエッセイでは、市場で生きのこるマカロニがもつデザインの必然性が話題になっており、ここでは見た目の美しさ、つまり芸術性よりも（ X ）性に光があたっていると感じました。一方、IIのエッセイでは、知の容器としての新書という性格を意識した、デザインの（ Y ）性に力点があるのかなと思いました。

〈語群〉

ア 情緒                    イ 人工                    ウ 具体  
オ 客観                    カ 主観                    キ 実用  
ケ 論理                    コ 象徴                    ク 自然                    エ 抽象

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

事件が起きたのはその日のことだ。まさに、事件だった。クラス対抗の合唱コンクールの指揮者に御木元さんみきもとが選ばれたのだ。<sup>①</sup>もう少し正確に言えば、御木元さんを、選んだ。このままだと彼女は一度もその素顔を見せることなくクラスを離れていってしまうだろう。なんとかして関わりたかった。こちらを振り向かせたかった。彼女のためよりも、私のためだ。

御木元さんはどう出るだろう。想像するだけでどきどきしてしまう。私は彼女が去年は歌わなかったのを知っている。壇上の列に並んではいたけれど、口を開けているふりをしていただけだった。そんなのは下から見てもわかる。あまり歌が好きではないのだろうと思った。指揮者選ばれた今年も、去年と同じようにやり過ごすつもりだろうか。音楽家の娘としての彼女の指揮者ぶりを見極めたい——それはたぶん私だけでなく、普段は無関心を装っているクラスメイトたちもひそかに願っていることに違いなかった。

だけど、残念ながら、彼女を見守る余裕は私にもなかった。御木元さんはなぜか私をピアノに指名した。驚いて椅子から飛び上がり、その勢いもあって、弾けないのに弾けるとうなずいてしまった。弾けないと断ったらそれで終わりだ。<sup>②</sup>やっとなぐってきた御木元さんとの縁をここで切つてしまいたくはない、その一心だった。

それから猛特訓だった。なにしろ自分のためだけに楽しんできた自分勝手なピアノだ。譜面も苦手なら運指も苦手だった。音符に髭が何本もくっついているとそれだけで腰が引けてしまう。シャープがふたつ以上になるとまごつく。クラス委員のひかりに手伝ってもらって楽譜と鍵盤を連動させるのに必死だった。ひかりのほうが私なんかよりよほどピアノがうまかったはずだ。あれくらいの楽譜なら初見で弾けたんだと思う。それなのにへたくそな私のピアノに辛抱強くつきあってくれた。ひかりにはほんとうに感謝している。

雨ばかり続き、私は毎朝毎夕カッパで自転車を漕いだ。御木元さんも自転車だったはずなのに、滅多に会わなかった。

考えてみれば、御木元さんが御木元響ひびきの娘だという噂の真偽を誰も確かめたわけではなかったと思う。でも今や疑う余地もなかった。彼女は合唱コンクールの指揮者になった途端、まるで別人のようだった。本人はきつとあれで抑えていたつもりなのだろう。それでもどうしようもなく漏れてくるのは合唱、指揮、歌、音楽、そういうものへの熱情だった。口の開け方、声の出し方から始まって、曲の捉え方とらえかた、その表現のしかた、今まで意識したこともなかったことを次々に示されて、私たちは呆然ぼうぜんとするしかなかった。意外に気が短いところもあって、やる気になかったり指導についていけなかったりするクラスメイトをびしびし叱った。あやちゃんは泣きそうだったし、早希さきは怒っていた。

御木元さんが A をしているのは明らかだったけれど、

A でも回らないよりよっぽどいい。練習の途中、彼女が曲を口ずさむたびにそう思った。たった何小節かを早口に歌うだけで風が通ったような衝撃がある。そのあまりにも豊かな声に圧倒され、聞き惚れるほ。この瞬間に立ち会えるだけで僥倖やきようこうだと思った。

やがて迎えた合唱コンクール当日も雨だった。あの日のことは忘れてしまいたい。御木元さんにはもちろん、ひかりにもみんなにも、謝る元気も出ないくらいの壊滅状態だった。

「千夏ちなつのピアノはすごかった」

今でもいわれるのだ。

「あんなピアノは初めて聴いた」

「千夏の目、完全に泳いでたもんね」

「そうそう、視線も定まらないくらい緊張しちゃって、声をかけるのも怖かったよね。ただでさえ危なっかしいピアノの音が全然伸びなくってさ」

「まあ、控えめにいって、ぼろぼろだったね。見事なまでにぼろぼろで——」

哀れを誘ったらしい。完全に我を失って自滅していくピアノを聴いて、クラスメイトたちの間にも緊張が走った。こんなふうになるのか。たかが校内合唱コンクールでこんなになっちゃうのか。千夏ちなつってばほんとうに恰好悪いかっこうわるい。恰好悪すぎて見ていられない。それが結果的には幸いしたらしい。

「思わず手を差し伸べたくなっちゃったね」

合唱コンクールの修羅場を経て、その後のクラスはかえってまとまった。御木元さんだけはひとりでまた合唱コンクールの前の場所へ戻っていった。合唱がうまくいってれば少しは違ったんだろうか。あるいは、瀕死ひんしのピアノが彼女を怒らせてしまったのかもしれない。

もうすぐ今年も終わりだ。自転車で家を出るときに気合いが要るようになってきて、ぐるぐる巻きのマフラーと二枚重ねの手袋とで防備してペダルを踏み込む。これからまた頻繁に「どこにでもいるようなカップ」のお世話になるのだろう。(中略)

学校に近づくにつれ、自転車通学の生徒をちらほら見かけるようになる。今朝は川を越えたところで、見覚えのある青いマフラーが目に入った。コートの紺ととてもよく合っている。おはよう、と声をかけると、振り向いた御木元さんは、おはようと答えてくれた。そこからふたりで前後に並び、学校まで走った。校門を通り抜け、揃って自転車置き場で下りたとき、はじめて御木元さんが私のほうを見ていった。

③「歌、歌うといいよ」

え、と聞き返した。彼女が何をいつているのかほんとうにわからなかったのだ。

「歌を歌ってみたら？」

御木元さんはいい方を変えて、でもさつきと同じことだけを

いい、そのまま校舎へ入っていつてしまった。

④「ピアノは駄目だけど。そういうことかな、と思う。ピアノは駄目だけど、とは御木元さんはいわなかったけれど、それを聞いたかっただんじやないか。ピアノはあきらめたほうがいいなんてなかなかいいにくいから、とりあえず歌を勧めた。きつとそうだ。そうだと思っただら急に腹が立ってきて、手袋もマフラーも外さないまま校舎に飛び込んだ。走って、頑かたくなような背中に追いつく。

「どうして簡単にやめろなんていうの？　なんでそんなことがいえるの？」

私の勢いに御木元さんが驚いている。

「何の話？」

「何のって、今、御木元さんが私にピアノはやめたほうが良いって」

「いつてないよ、そんなこと。歌を歌うといいっていっただけ」

「おんなじことでしょ、ピアノが駄目だから歌にしたらっていいたいんでしょ」

御木元さんは目を瞬しほたかせた。

「原はらさん、何いつてるの」

「だって私、この声だもの。こんな弱ちくちくって、大きな声を出そうとするとすぐに裏返っちゃうような声で、歌なんか歌えないよ」

「——歌ってたじゃない」

今度は私が目を瞬かせる番だった。

「『麗うるわしのマドンナ』。すぐくよかったよ」

うちのクラスが合唱コンクールで歌った——私がピアノで惨敗した曲だった。御木元さんはもう階段を上っていきこうとしている。

「待って、どうして、私、ピアノ弾くだけで精いっぱい、ぜんぜん歌うどころじゃなかったのに」

追いがると、御木元さんは足を止めた。

「合唱コンクールじゃないよ、マラソン大会。ゴール前であの歌を聴いた。グラウンドで歌い出したの、原さんでしょう」

あつ、と思った。そうだった。思わず歌った。ひとりで苦しげに走る御木元さんを見ていたら自然に歌が口をついて出た。他に励ます方法を思いつかなかった。いつのまにかクラスの子たちが声を揃えていた。

「あの歌を聴いて、震えたんだ。これが歌の原点だと思った。そうして私は——」

「——私は？」

「ううん、なんでもない」

と御木元さんは小さく首を振り、階段の三段くらい上を上げていく。前を見たまま、やわらかな声で話す。

「ピアノも続けたらいいよ。ピアノも、歌も、原さんが音楽を続けていってくれたら——」

彼女はそこでまた言葉を切り、いちばんふさわしい言葉を探

すかのようにかすかに首を傾けた。固唾かたずを呑のんで続きを待つ私を振り返り、ちょっと照れたみたいに笑った。

「——うれしいな」

⑤ 自然に鼻歌を歌っていたらしい。弟がにやにやしている。

「お姉ちゃん、よくいわれない？ すごくわかりやすいって聞こえないふりをしてテーブルのお客さんへ水を運ぶ。」

「いらつしゃいませ、何にいたしましょう」

尋ねると、若いカップルはメニューを開いたまま目を上げる。「おすすめは？」

冷え込んできている。こういう夜は鍋焼きうどんがよく出る。天ぷらうどんも、たぬきも、鴨南蛮かもなんばんも、どれもおすすめだ。でも。

「カレーうどんがおいしいですよ」

「じゃあカレーうどん」

「私もそれ」

「ありがとうございます」

伝票に書き込んで厨房へ戻る。

「カレーうどん二丁」

注文を通してから、二杯分ちゃんと残しておいてよね、と念を押す。

なんだかすごく楽になった。やつぱり意地みたいなものに取り憑よかされていたのかもしれない。音楽を続けるといい、という



御木元さんの一言で解き放たれたような気がする。御木元響のヴァイオリンが音楽の知識も技術もない私の胸にもまっすぐ飛び込んで膨らんだように、御木元玲の歌に身体がなぎ倒されるような錯覚を覚えたように、それを受けとめることのできる土壌を私は耕していこう。それでいい。音楽で身を立てるなら別だけれど、たぶん私はそうしない。そうできない、というのは少しだけ違う。私には私の、別の道があるんじゃないか。

思い出した。<sup>⑥</sup>これは親の職業、私は私。そう思うようになる前の、もつとずつと前の話。私は父のうどんが大好きだった。どこで何を食べても、父のうどんが世界一だと信じていた。今でも信じている。だからこうして毎日店に出られる。あの頃、世界一だとよろこんだカレーうどんは、幼い私の舌に合わせて少し甘めだった。新しくなった父のカレーうどんは、舌にぴりりと辛みが残る。こんな娘の成長に沿うように父のカレーうどんも成長してくれている。今はとにかくこのうどんを人に食べてもらうのがうれしい。

弾ける子と弾けない子にあらかじめ振り分けられているように、うどん屋の娘として生まれてくる子とそうでない子も振り分けられている。父のあのカレーうどんを食べることのできる子とそうでない子とに。はじめから与えられている自分の幸運に気づかない子を横目で見ながら、私自身もそうだったことをようやく知った。

夜、御木元さんが来ることになっている。初めて友達を家に

招いた。家というより店だけれど。お母さんがしばらく演奏旅行で留守だという彼女に、自慢のカレーうどんをぜひ食べていってほしい。それでちよつと羨ましがってもらえたらいいなと思っている。<sup>⑦</sup>

(宮下奈都『よろこびの歌』所収「カレーうどん」より)  
\*僥倖：思いがけない幸運。

問一「<sup>①</sup>もう少し正確に言えば、御木元さんを、選んだ」とあります。私がこのようにしたのはなぜですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「御木元さん」と接する機会をつくることで、彼女がどのようなことを考え、音楽にどのように取り組んで、指揮を振るかに強い興味を持っていたから。

イ 音楽の才能が豊かな「御木元さん」には、今年の合唱コンクールこそは、遺憾なくその才能を発揮して欲しいと願い、それを全力でサポートしたいと考えていたから。

ウ 有名な音楽家を母に持つという「御木元さん」と、自身の境遇を重ね合わせているうちに親近感を抱き、どうしても関係性を作りたいと思っていたから。

エ 音楽が大好きな「私」にとって、「御木元さん」は憧れの存在であり、どのような音楽を奏でるかに興味を持ち、一緒に音楽に取り組むのを楽しみにしていたから。

問二「やつとめぐつてきた御木元さんとの縁をここで切つてしまいたくはない」とありますが、合唱コンクール後、「私」と「御木元さん」の関係は遠のいてしまいます。それがわかる一文を文中から探して、最初の八字を答えなさい。

問三 A に当てはまる言葉として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空回り
- イ 堂々巡り
- ウ 手詰まり
- エ 遠回り

問四「歌、歌うといいよ」とありますが、「御木元さん」が「私」にこのように述べたのは、どのような思いがあったからだと考えられますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 合唱コンクールでは、口の開け方や発声の仕方などの表現方法を重視していたが、マラソン大会で「私」が歌った歌は、まわりの友達の気持ちも一体となり、とても感動したという思い。

イ マラソン大会で耳にした「麗しのマドンナ」から、その曲が持つ本来の意味や、解釈を感じとり、歌の原点というものにはじめて気がつかせてくれた「私」の歌声をまた聞きたいという思い。

ウ 合唱コンクールで惨敗した「麗しのマドンナ」の苦い思い出を、マラソン大会の時に「私」が心をこめて歌ってくれた歌が帳消しにしてくれて、また音楽を続けていきたいという思い。

エ マラソン大会の苦しい時に、「私」が励ますために歌ってくれた歌を聞いて、その自然な感情の高まりこそが歌の原点だと気づき、それを教えてくれた「私」には音楽を続けて欲しいという思い。

問五「ピアノは駄目だけど」とありますが、「私」にとってピアノとはどういうものでしたか。それが書かれている一文をここより前の文中から探して、最初の四字を答えなさい。

問六「自然に鼻歌を歌っていたらしい」とありますが、ここでの「私」の心情として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽を続けたいとかたくなになっていた「私」にとって、音楽を楽しもうとしている「御木元さん」は大切な存在となり、そんな彼女が家に来るので胸を弾ませている心情。
- イ 「御木元さん」の言葉から、気持ちちが楽になり、距離が縮まった彼女を初めて家に招待して、「私」の父が作る自慢のカレーうどんを食べてもらうのを楽しみにしている心情。
- ウ 音楽の知識も技術も未熟な「私」は、「御木元さん」に音楽を続けて欲しいと言ってもらえたことで、彼女に認められたような気がして、とても嬉しく思っている心情。
- エ 「御木元さん」に「私」が世界一だと信じている父のカレーうどんを食べてもらえば、「私」が、彼女の歌に衝撃を受けた時と同じように、驚くに違いないとわくわくしている心情。

問七「これは親の職業、私は私」とありますが、ここでの「私」の説明として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽を豊かに享受することができた「私」
  - イ 父のうどんをこよなく愛していた「私」
  - ウ 意地みみたいなものに取り憑かれていた「私」
  - エ 音楽で身を立っていかうとしていた「私」
- 問八「それでちょっと羨ましがってもらえたらいいなと思っている」とありますが、「私」はどのようなことに気がついて、どのような思いになったといえますか。説明しなさい。

五 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「かぐや姫」との結婚を望む大納言は、結婚の条件である「龍の頸の珠」を手に入れようとするが、しり込みをして取りに行こうとしない家来たちに腹を立てている。

男ども申すやう、「さらば、いかがはせむ。難きことなりとも、仰せごとに従ひて、求めに <sup>a</sup> まからむ」と申すに、大納言、御腹<sup>みはら</sup>ゐて、「汝らが君の使と、名を流しつ。 <sup>①</sup> 君の仰せごとをば、いかがは背くべき」とのたまひて、龍の頸の珠取りにとて、出だし立て給ふ。 <sup>②</sup> この人人の道の糧、食ひ物に、殿内の絹・綿・銭など、あるかぎり取り出でて、添へて遣はず。

<sup>③</sup> 「この人々ども帰るまで、齋<sup>いしも</sup>ひして、われはをらむ。この珠取りえでは、家に帰り来な」と <sup>b</sup> のたまはせけり。おのおの仰せ承りて、まかり出でぬ。

「『龍の頸の珠取り得ずは、帰り来な』と <sup>④</sup> のたまへば、いづちもいづちも、足の向きたらむ方へ往なむず」 <sup>⑤</sup> かかる術なきことをし給ふこと」とそしりあへり。賜はせたる物、おのおの分けつつ取る。あるいはおのが家に <sup>c</sup> 籠りゐ、あるいはおのが行かまほしき所へ往ぬ。「親・君と申すとも、かくつきなきことを <sup>d</sup> 仰せ給ふこと」と、 <sup>e</sup> ことゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひたり。

〔『竹取物語』新潮社より〕

\* 御腹ゐて…ご機嫌が直つて  
\* 齋ひ…肉食を断ち、行いを慎んで身を清めること

問一「<sup>a</sup> まから」「<sup>b</sup> のたまはせ」の文中での意味として、最も

適当なものをそれぞれ後から一つ選び、記号で答えなさい。

a まから (まかる)

- ア 参る
- イ 退出する

- ウ おっしゃる
- エ 申し上げる

b のたまはせ (のたまはず)

- ア 言います
- イ くださる

- ウ おっしゃる
- エ 申し上げる

問二「<sup>c</sup> 籠りゐ」「<sup>d</sup> 仰せ給ふ」「<sup>e</sup> ことゆかぬものゆゑ」の読み方を、それぞれすべて現代仮名遣いで答えなさい。

問三「<sup>①</sup> 君の仰せごとをば ( ) 背くべき」で使われている表現

技法として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 倒置
- イ 比喩
- ウ 対句
- エ 反語

問四 「この人人の( )」<sup>②</sup>「この人々ども( )」<sup>③</sup>からわかる

「大納言」の人物像として、最も適当なものを次から一つ  
選び、記号で答えなさい。

- ア 家来から良く思われたいと、見栄をはる人物
- イ 事の成功のためには、何でもしてしまう人物
- ウ 家来を疑う、用心深い人物
- エ 家来の無事を願う、心優しい人物

問五 「のたまへば」<sup>④</sup>の主語として、最も適当なものを次から  
一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 男ども
- イ 龍
- ウ 大納言
- エ 親

問六 「かかる術なきこと」<sup>⑤</sup>という言葉には、「男ども」のど  
のような気持ちがこめられていますか。最も適当なものを  
次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 主人の強い言葉に対して、恐れている気持ち。
- イ 大切にしてくれる主人に対して、感謝する気持ち。
- ウ 一生懸命な主人の姿勢に対して、尊敬する気持ち。
- エ 無理な命令をする主人に対して、あきれている気持ち。

問七 龍の頸の珠を取ることについて、「大納言」と「男ども」  
の意見の食い違いを簡潔に説明しなさい。